

スタートアップ・アドバイザーの目から見たベンチャー創出への課題と期待

立ち上げから5年、紆余曲折を経ながらも新規事業創出のためのプラットフォームとして育ってきたベンチャー開発戦略研究センター。池上理事(当時)をまじえ、3人のスタートアップ・アドバイザーに、同センターの課題点と今後への期待について聞いた。

ベンチャーへの関心が希薄だったが最近には確実に意識が変わってきた

池上 5年前にベンチャー開発戦略研究センターを立ち上げた当時は、産総研の内部ではその行方に懐疑的な見方が多かったものです。外部からも公的支援を受けるベンチャービジネスというものが果たして成り立つのか、IPOというハードルは高過ぎないかといった声が寄せられました。ただ紆余曲折を経ながらも、これまでに数多くのベンチャーが起業しました。センター設立時から、企業支援を手掛けた渡辺さんは、産総研の手掛けるベンチャー開発にどんなイメージをお持ちでしたか。

渡辺 前の会社の上司に紹介されたのがSAになったきっかけですが、国研として蓄積した確かな技術に裏打ちされているだけに、本物のベンチャービジネスを手掛けられると大いに期待しました。私自身、総合商社のプロジェクトマネジメントやコンサルティング会社での新規事業支援の経験がありましたから、上手にプロデュースすればユニークな起業で成功する確率が高い

と見ていました。ただIPOはやはり、ハードルとしては高い印象があります。私としては、技術蓄積に経営リソースを補完して育て上げ、大企業とアライアンスするといった成長シナリオをイメージしていました。

野村 私は産総研らしいベンチャー開発があってもいいというのが持論です。産業構造をガラリと変えるような、ノーベル賞級の研究に支えられたベンチャービジネスや、公的支援がないとテイクオフしにくい計測、地質などの領域でのベンチャービジネスです。渡辺さんが立ち上げたアイコンタムは後者の代表例かもしれません。

藤田 世界に通用するベンチャー企業を育てるといった夢に惹かれたことが大きいですね。私の専門のバイオテクノロジーやメディカルの分野は、欧米にやや遅れを取っている観を否めませんから、国の技術シーズを使って何とか巻き返したいと思います。

渡辺 ただ、ベンチャー開発戦略研究

センターの立ち上げ当時は、体制がほとんど整っておらず一人で奔走しなければなりません。技術蓄積も、それぞれの研究ユニットがどんなことをしているか把握しにくい状況でしたから、研究者との個人的な出会いを通じて一部の技術を知ったに過ぎません。研究者もベンチャー企業を立ち上げることにほとんど関心を持っていませんでした。それが最近では関心を持つ研究者がかなり増えてきたようです。

野村 研究ユニット長の意識も確実に変わり始めています。ベンチャー企業立ち上げが研究成果の到達点の一つといった意識が広まったように感じます。ただ、課題も少なくありません。研究ユニットが地域拠点所長のコントロールが利かなくなっているのは、問題のような気がします。研究成果を世の中に普及するといった官意識も強く、起業家として世の中に打って出るといった気概が乏しいように感じます。

渡辺 ある研究者に研究内容の説明を



藤田 和博
スタートアップ・アドバイザー



野村 哲雄
スタートアップ・アドバイザー



渡辺 純一
アイコンタム(株)代表取締役&CEO
(元スタートアップ・アドバイザー)



池上 徹彦 元産総研理事（ベンチャー戦略推進担当：右から2人目）

頼んだら、しきりに学術的な価値を強調していました。でも、私が聞いたかったのはビジネスとして成立する可能性。学術用語をビジネス用語に“翻訳”できない人が多いのは確かです。ただ、スキルは非常に高いものをもっていますから、じっくり話し合って理解してもらえれば、それこそビジネススクールを修了したのかと思うほどしっかりしたビジネスプランを立案してしまう人もいます。

藤田 最近は大いぶ変わりましたが、それでも一部に閉鎖的な体質が残っているように感じます。研究者はとかく研究室にこもりがちですが、市場に打って出れば自分の研究がどんなふうに関与するかを実感でき、それで研究がさらに触発されモチベーションも高まっていくはず。マーケットを意識すれば研究がより活性化していくのではないのでしょうか。

渡辺 市場の評価にさらされると、例えばクレームも研究者に降りかかってきます。でも、それを解決すべくさらに研究に打ち込んでいくことで質も上がり、ベンチャービジネスとして成功する確率も高まるし研究成果も上がっていきます。この好循環に入れば、理想的ですね。

野村 起業家は人を喜ばせることが好きでないと、なかなか成功しません。研究も本来は同じです。人が喜んだり驚く顔を見るのが研究の励みになるはずで、

研究者として有能な人ほどベンチャー成功への可能性が高いと思います。

池上 お金を稼ぐことは悪といった意識も強いかもしれませんね。でも、ビル・ゲイツが自分の死後50年間で全財産を寄付すると発表したように、お金を稼いで社会に還元する方法もあります。お金に対する意識が変わればベンチャービジネスへの関心も、もっと高まるでしょうね。

モノづくりの技術、技能を培って いけば研究がもっと生きてくる

渡辺 時間に関する意識も変える必要があります。とくにベンチャービジネスはスピードが肝心ですが、時間軸を定めて一定の研究成果を出すといった意識に乏しい人を見受けます。ビジネスは相手のあることです。それこそ徹夜をしてでも期日に間に合わせる気迫が欠かせません。

藤田 産総研のなかでモノづくりの技術を養成していくこともこれからの課題でしょう。いくら素晴らしい研究でも、実際にモノができないことには話になりませんから。

野村 “電子顕微鏡を扱ったら誰にも負けない”、“旋盤を回すことができる”といった技能をもつ人を軽視しすぎた嫌いがありますね。だから製品を企画・設計して事業化するといった現場のつくりこみの技術・ノウハウが蓄積されていない。

池上 そういった技術・ノウハウは、大企業よりも中小企業にこそ数多く蓄積されています。中小企業との交流を深めることをこれからは考えるべき時ですね。

藤田 それには技術を与えてあげるといった姿勢を改めるべきでしょう。中小企業は潤沢に資金を持っているわけではありませんから、技術情報の開示だけでお金を取られるというのは抵抗感が強いですね。

野村 その点はずくばの「デジタルものづくり研究センター」の仕組みを参考にするといいかもしれません。いろいろな企業が参画して、無償で加工技術データベースを利用できますし、次の研究テーマも見つかるかもしれませんから。

池上 私は研究者の皆さんにはぜひ、イノベーションを巻き起こしていただきたいと願っています。そのためには、単に研究に打ち込むだけではなく、「Do innovation yourself」が何かをもっと考えてほしいですね。

渡辺 そうですね。イノベーションは議論ではなく実践が大事です。だからこそ、もっと市場に打って出ることに関心を燃やし、IPOを何としてもやり遂げるといった気迫を持っていただきたいですね。私が知っている産総研の技術蓄積はほんの一部に過ぎません。本当は宝の山のはずなのですから、ベンチャー開発戦略研究センターをプラットフォームに、どんどん新規事業化に名乗りを上げることを期待したいものです。